無敵スライム

算裏　友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無敵スライム

【Ｎコード】
Ｎ２００４Ｘ

【作者名】
算裏　友城

【あらすじ】
最弱のモンスターはなんだろう？　その問いかけに人々が声を揃え答えるのは、決まってこう、“スライム”だ。
だが、もしも最弱代表たるスライムが最強の力を持っていたとしたら……。
無敵シリーズ第四弾、無敵スライム、開幕！

第一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー昇龍のリーダー

この世界において、“最弱モンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

ある酒場にて一つのパーティーからあがった、ツマミついでの議題である。

彼らはどうやら難所とされるダンジョンを攻略し、上機嫌で打ち上げをしていて初心者語りから派生して来た話らしい。

リーダー格の熊を思わせる隻眼の大男が、“俺の前ではモンスターなぞ等しく雑魚だ”等と酒のせいもあり大きく出れば、切り込み隊長の剣士が“最弱っつったらボーッつっ立ってるだけのナマケモンキーだろ”と言う。

しかしすかさず賢者が、いや、と否定し“自分的にはウォルオウィプスの類いだ”と述べる。最後に女魔法使いが“デッドリーフに決まってるじゃない”と反論した。

「何言ってんだよお前ら、ナマケモンキーはな、攻撃を受けない限り何もしてこないだろうが！　急所を一突きだね。間違いなく奴だ！」

「しかしですね、仕損じれば手痛い反撃がありますよ。群れているようものなら中級者と言えどてこずる恐れがあります。その点、初歩的な浄化術で簡単に駆逐出来るウォルオウィプスこそ最弱かと」

「オバケ嫌いな人はどうなのよ！　デッドリーフなら、枯れてる

しちょっとした炎で凄く燃えちゃうのよ。アイツでしょ？」

ヒートアップする議論。このまま閉店まで騒がれてもたまらぬリーダーは、まぁまぁ待て待て、と皆を諌めつつ言う。

「おめえらはな、自分の立場でモノを言い過ぎなんだよ。よぉく考えてみろや……動きが鈍く、痛えのもなく、群れず、駆逐も容易で魔法もよく効く、そんな雑魚中の雑魚がいるじゃねぇか」

「おいおいリーダー、俺は敢えてそいつを避けてたんだぜ？　どんな初心者でもそいつは倒せらぁ」

「右に同じく。下手をすれば私の息子でも倒せるでしょうね。因みに今年で六つですが」

「えっ、えっ、何？　そんなの居たっけ？」

未だ気付かぬ勘の悪い魔法使いに、賢者はそっと耳打ちをした。

ああ、と得心のいった表情を浮かべる魔法使い。そして皆はいっせーの、せでモンスター名を叫んだ。

「「「「「スライム！」」」」」

と。スライムとは、最早冒険者らにとって周知のお馴染み最弱モンスターである。

大概は大きさにして二十から三十カラム前後（約二十から三十セ

ンチ）、子供の蹴球遊びに使用されるボールよりも一回りから二回り位大きい程。

地方によって違いはあるがゼリー状で非常に軟らかく、海水の様に無色透明に微かに青みを含ませた色合いのモンスターである。

よく、打撃や剣はその性質やイメージから通用しにくい、と言われるが実際には水分を内包している表皮を破ってしまえば勝手に崩壊する……そんな程度のキングオブザコ。

子供がボール代わりに蹴っていたら死んだ、とかの話も有名でよく聞く。

生まれ変わりたくない生物ランキングでは、恐らくダントツの一位を飾るであろう気の毒な生き物である。

だが……これから先そんな認識が通用しなくなる事を、誰も知らなかった……。

あれは酒場の閉店間際。例の四人パーティーが店から出て宿へと向かっている頃だった。

彼らが宿泊するのは、ガロスの宿。初級冒険者らはテントの中から眺め、中級冒険者は財布を見て諦める、そんな宿である。

賢者に肩を支えられフラフラとおぼつかない足取りで歩く剣士。妙なテンションで奇妙な歌を口ずさみ魔法使い。

そしてリーダーといえば“ちょっと小便に行って来る”と言い、

あろうことか町外れの草むらへと走って行ってしまったのだ。

これまた陽気に故郷の歌を口ずさみならぬ鼻ずさみ、丁度背高なフレリーフの木の裏へと回り込む。さて、用を足そうかと思ったその時であった。

ガサッ、と草むらが揺れ動く。

「！？」

が、彼は腐ってもパーティー“昇龍”のリーダーであり、この道二十ウン年のベテランである。

即座に視線を音の方向へ向け、付近に耳をすませ迎撃体勢をとった。流れる様な一挙一動に隙はない。

物音の正体は直感的にモンスターである、と認識。彼はあれこれと既に思考を巡らせていた。

町のそばだからと完全に油断していた。武器は宿に預けていて手元にない。この辺りならばウルフか、あるいはポイズンスネークか……いずれにしろ素手でやり合えるか？　酔いが回っているし……。

ガサ、ガサと草むらは不気味に揺れ、敵の接近を伝える。僅かな洩れ灯りを頼りに彼はその方向をじぃっ、と凝視した。

それは思ったよりも小さくて……。

「えっ……？」

子供の遊具を二回りも大きくした、球状の、きらきらと僅かな光を弾くボディ。彼は途端に緊張状態から解かれた。

「ナンだよ……スライムじゃねぇか！」

大方道に迷ったのか、たまたま街の近くに現れたのだろう。取り立てて珍しい事でもない。

さて正体も分かったところで、一瞬でも自分を恐怖させたちっぽけなそれを、リーダーは許す事が出来なかった。

そうだ蹴りでもくれてやろう、そう思い再び雑魚を視界に収め……。

（あん？　どこ行った……？）

しかしスライムは忽然と姿を消した。いや、違う、正確にはリーダーの背後に素早く回り込んでいたのだ。

ベチャァァァァ！

「ぐぅあああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

パーティー昇龍のリーダー、ブレッドに勝利した。

……翌日、ブレッドは瀕死の状態で発見され、教会の世話になったという。

彼は、何に襲われたのかを、誰にも語る事はなかった。

第二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　新人パーティーひまわり（戦士Ｌｖ．１　×　２）

「な、なぁ、ボクたち　だいじょうぶだよな？」

ひまわりの　リーダーは　いった。

「だ、だいじょうぶさ　たびだつまえに　かわのよろい　をかっただろ？」

ガサッ……

「ひっ　モ、モンスター！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「な、なんだよ　スライムじゃないか　こんなやつ　さっさと……」

バシッ！　ピシャッ！

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああー！？」」

パーティーひまわり　にしょうりした。

第三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　新米勇者マット　（勇者Ｌｖ．２）

「いよっしゃぁ、らくしょうらくしょう　このちょうしで　すすむぜ！」

ガサッ……

「ん？」

モンスター　スライムがあらわれた

「いまさらかよ！　いいぜ　しんわざを　ためしてやる　いくぜぇぇ！」

ベチィッ！

「ぐぶうう！？」

しんまいゆうしゃ　マット　にしょうりした

第四ゲル　無敵S　VS　初級者ウィザード　リリィル　（ウィザードLv.3

「あぁ　こまったわ……　まほうつかいすぎて　MP（マジックポイント）カラッポ……」

ガサッ……

「えっ　ちょ、こんなときに！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「な、なーんだ　アンタなんか　つえの　だげきいっぱつで……」

ズドッ！

「きゃあああああああ

第五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　なりたて拳士ダベッカ　（拳士Ｌｖ．４）

「よしっ　あといったいだ　あといったいたおせば　ゴールドがたりて　あたらしいグローブ　かえる！」

ガサッ……

「きたぁぁぁぁ　かねをだせぇぇぇぇ！」

モンスター　スライムがあらわれた

「ウソだろっ！？　いっせんにも　ならない……」

グバッ！

「う、ウオオオ

第六ゲル　無敵ＳＶＳ商人見習いシンゴ　（商人Ｌｖ．５）

「まったく　はやくほかのメンバーを　あつめないと　そざいも
あんしんして　ちょうたつできません」

ガサッ……

「なっ　モンスターですか！　ここは　けむりだまでにげ……」

モンスター　スライムがあらわれた

「あぁ、なんだ　おどろかさないでくださ……」

ビチャァァッ！

「なんですとォォォ

第七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　迷子勇者セイン　（勇者Ｌｖ．？？）

「うーん　あくましてんのうを　けちらしたはいいんだけど　…
…ここどこだ？」

ガサッ…

「！？　そこだ！」

セインは　ドラゴンスライサーを　はなった

ズバッ！

モンスター　スライムは　まっぷたつになった

「っと　スライムだったのか　ごめんな　ものすごい　さっきを
かんじたから　……って、スライム！？　まさか　ボクのこきょう
ちかくまで　もどってしまったのか！？」

セインは　あわて　はしりさった

ズル……ズル……

ピチュッ……

スライムは　くっついて　さいせいした

第八ゲル　無敵ＳＶＳ野生モンスタートロール（獣人Ｌｖ．６）

「ニンゲン　タオシタ　オレ　イマ　イイキブン」

グチャ……

「ン……？　アアッ　ツイテネエ　スライム　フンヅケチマッタ！」

ドスドスドスッ！

「ギ、ギヤアアア

第九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ひよっこ剣士マグナ　（剣士Ｌｖ．７）

「ちくしょう、ちくしょう　なんだよアイツら！　ボクだってウルフまでなら　たおせるんだ　こどもだからって　バカにするな！」

ガサッ……

「なんだよ　モンスターか！？」

モンスター　スライムが　あらわれた

「タイミングわるかったな　ボクはいま　きがたってるんだ！くらえぇぇー！」

ビシィィッ！

「うっ、うわあああー！」

ひよっこけんしマグナに　しょうりした

第十ゲル　無敵S　VS　ベテランパーティー昇龍リーダー　ブレッド　（重

スライムがあらわれた

「どりゃぁ！」

バシャ……

スライムがあらわれた

「ぬォォォ！」

ベジャ……

「おい　……リーダーさ　なんでスライムばっか　かってんの？」

「このあいだの　いっけんいらいですね」

「あんがいおっちゃん　スライムに　やられたんだったりしてー」

ガサッ……

スライムが　あらわれた

「きさまで　３３たいめだ　かくごォォ！」

バシィッ！

「ぎゃあああああああああああああああー！？」

ブレッドに　しょうりした

「「「リーダー！？」」」

第十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー昇龍残りメンバー　（重剣士　賢者　炎

「なんだコイツ　リーダーを　いちげきで！」

「ただの　スライムでは　ありません　ステータスじょうほうが
いっちしない」

「おっちゃんを　よくも！」

「くらえぇぇ！」

じゅうけんしは　マグナスラッシュを　はなった

「しかたありませんね！」

けんじゃは　スターライトを　しようした

「わがほのおよ　てきをやきつくせ！」

ほのおのまほうつかいは　プロミネンスを　しようした

ビシッ　ドカッ　ベチャ

「ぐぁ　あぁ……」

「ばかな……」

「こんなことって……」

パーティー昇龍に　しょうりした

第十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティーアサシンアサルトのリーダー

「それじゃ……我らの功績を讃え……乾杯……」

それはまるで、絶望の最中執り行われた最後の晩餐の様であった。

もしくは雰囲気だけなら明日、魔王がやってくる辺境の村のそれだ……パーティー“アサシンアサルト”の打ち上げ会は。

「肉……うまい……」

「魚も……いい……」

ロボットの品評会か、あるいは狂信的儀式……さかも皆の格好が漆黒のコートであったり、深い帽子着用であったり……目と鼻元以外は徹底的に晒していない出で立ちが尚、不気味さを強調していた。

「……この度は……襲撃人数百人……達成……めでたい……」

リーダーのアサシンは、皆に対し虫の羽音程の声でボソボソと言った。

「おめでとう……」

「おめでとう……」

「めでたい……」

残りの仕事人三名が同じく呟く。

「だぁがしかぁし！　……ゴホン……ゴメン、興奮し過ぎた……我々以上に……襲撃を成功させているパーティーは……まだまだ居るだろう……そこで……明日から……クィクス大陸に……向かう……」

「「「クィクスに！？　……ごめん……キャラ作り、キャラ作り……」

「我らは……次のランクに……進むべき。それに……ここでは……名を知られ過ぎたし……潮時だと思う……」

「確かに……そうだ……」

「俺は……子供に石を……投げられた……」

「まだいい……ワタシは問答無用で……切り掛かられた……」

彼らの言うように、パーティー“アサシンアサルト”の悪名は、あまりに知られ過ぎてしまった。

基本的な活動といえば、汚い金持つ貴族やぼったくり商人などをターゲットに襲撃を繰り返し、金品強奪あるいは暗殺を行うという内容だ。

だが、それはれっきとした犯罪であるし悪の行いである。無論そんな彼らに対しては非難の声の方が大きい。敵の方が遥かに多いのである。

何故四人が汚名を着てまでこの道を突き進むのか……それは本人ら以外は誰も知り得ない事だろう。

さて、話を戻すが、実は彼らが九十九人目と百人目に選んでしまったターゲット……それがどうやら予想以上の有力者であった為に、名は派手に売れてしまい挙げ句大量の追っ手が投入されてしまったのだ。

そしてリーダーの発言、それは国外逃亡の意味を含んでいる。皆も無論、承知であったが口には出さなかった。

「だけど……それでも、それでも、我々は続けなければならない！　いつの日か我らの流した血が汗が、清浄なる世界へと繋がらん事を夢に見ながら！」

「「「リーダー！　キャラ、キャラ！」」」

「あ……うん、ごめん……とにかく……打ち上げはここまで……明日の、準備しよ……」

「あの……」

「まだ一杯しか……」

「いやむしろ一杯も……飲んでないけど……」

「あ……」

打ち上げは再開された。

「他に何……頼む……？」

・

「皆……お腹いっぱいに……なった？」

「うん……」

「はい……」

「ええ……」

「じゃあ……こっそり、帰ろう……さらば……」

「「「さらば」」」

四人はそれぞれ別々の方角に消えていった。内、リーダーは北の方角へ茂みに紛れ走り抜けてゆく。

速度を保っているにも関わらず、夜の静寂は乱れもしていない。が、その時だ、背後に何かを感じたのは。

（何か……居る？）

自分の後ろを影のようにへばりつき追って来る何かが、確かに居る。

（なら……）

と、リーダーは年寄りの木々に目を付けると、なんと幹を駆け登り、枝のしなりを利用して跳躍。

背高な木々を見下ろしつつ、クナイを取り出すと気配目がけ投てきした。四本四本、計八本のクナイが降り注ぎ、確かにその何かへ二発が命中した。

クルクル回転、その後音なく着地を決めると、リーダーは慎重に着弾地点へと向かった。

転がっているのは亡骸か、あるいは……だが、そこにあったのは、何と切り株であった。

「なっ……か、変わり身だと！？」

ガサッ……

「しまっ……！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「えっ……？」

ばしいいいっ！

「きゃあああああああああああああああああああああああー！？」

アサシンアサルト　リーダー　クリスにしょうりした

第十三ゲル　無敵ＳＶＳ初心者パーティー　チューリップ　（戦士Ｌｖ．１

「なぁ　ボクたち　だいじょうぶだよね？」

チューリップのリーダー　はいった

「だいじょうぶ　ついさっき　はがねのつるぎ　と　てつのよろい　をかっただろ？」

ガサッ……

「な、なにかいる！」

「よし　いつでもこい！」

モンスター　スライムがあらわれた

「なんだよ　スライムじゃ……ん？　なんで　こんなところにスライムが……」

バシィッ！　ドスッ！

「「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいー！？」」

パーティー　チューリップに　しょうりした

第十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　速射ちガット　（銃士Ｌｖ．１１）

「ふん　どんなモンスターも　おれの　はやうちには　かなわないぜ」

ガサッ……

「ん、そこだぁぁ！」

ガットは　はやうちを　しようし……

ベチャァ！

「な、おれよりはやいだとオオオ

第十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー美女とケダモノ　（トレジャーハンター

「ちょ、ちょっとまって　おいてかないでよ！」

「うるさいな　なら　そのにもつを　へらせよ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「このにもつは　わたしのせんりひんなの　ひとつたりとも　てばなせるわけないでしょ！」

「ならあしをひっぱるな　はやくあるけ　ペースをみだすな」

「なによー！」

「なんだよ！」

バチィッ　ベジャッ

「「ぎゃあああああああ

第十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ビーストテイマー師匠と弟子　（獣使いＬｖ．３０

「ようしよし　レベルもあがったし　これでおまえも　りっぱな
ビーストテイマーだ」

「ありがとうございます　これでボクも……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「むっ　ちょうどいい　あのスライムを　なかまにしてみろ」

「はい！　えっとまずは　エサをなげて……」

バチィン！

「うわあああああああああ！？」

「なんだと！？」

ビチャァッ！

「ぐあああああああああああああああああああ！？」

ビーストテイマー師匠と弟子に　しょうりした

第十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　買い物帰りの少年　（一般人）

「はぁ　はぁ　はやくかえらないと　くらくなっちゃう」

ガサッ……

「うっ……モ、モンスター！？」

モンスター　スライムがあらわれた

（モンスターにであったら　しずかに　しずかに……）

バサッ！

モンスター　ウルフがはいごからきしゅうを　しかけてきた

「！？」

ドスッ！

「きゃいいいいいいいいいん！？」

モンスター　ウルフにしょうりした

ガサッ……

スライムは　さっていった

「いったい　なにがおきたの……？」

しょうねんは　ぼうぜんと　たちつくした

第十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　依頼実行中の男クリフ　（レンジャーＬｖ．２０）

ドカッ

「グオオオオオオ！」

モンスター　ギガベアーにしょうりした

「よし　いらいたっせいだ　さっさとかえって　ほうしゅうにありつくか」

ガサッ……

「ん　なんだ？」

モンスター　スライムが　あらわれた

「スライム……？　よし　ついでだし　たおしてやる……」

バシィ！

「ぐぅあああ！？」

クリフに　しょうりした

「う、そだ……おまえは　いったい……」

バシィィィィッ！

「ぎゃあああああああ

第十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　盗賊の男　（盗賊Ｌｖ．２２）

「うぎゃあああああああ

第二十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　双子魔法使いパーティー　デュアル　（氷魔法使い

「……」

「……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「「フリージングスフィアー！」」

ピキピキ……

スライムは　こおりついた

「あとはくだいてしまって……」

「それでおしまい……」

ピシッピシッ……

「「えっ？」」

バキィッ！

「「きゃあああああああ

ああああああああああー！？」」

パーティー　デュアルにしょうりした

第二十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ベテランパーティー昇龍リーダー　ブレッド

「ふぅ　きょうはここで　のじゅくだな」

「そうですね　テントは　わたしが　はりましょう」

「ごはんは　わたしつくる！　……ところで　リーダーは？」

「あっちで　すぶりしてるよ　……よほど　くやしかったみたいだな」

「ふんっ」

ブン

「ふんっ！」

ブン

「はぁぁっ！」

ビュン

「うおおォォォォ！」

ガサッ……

「でたな　そこかぁぁぁぁぁぁ！」

ドスッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああー！？」

パーティー昇龍リーダー　ブレッドに　しょうりした

第二十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　採掘兄弟　（採掘人Ｌｖ．２５）

「よっしゃあああ　ついにレアメタルを　ほりあてたぞ！」

「ほんとか　やったな！　しかしこっちは　くずいししか　とれないんだが……」

カン　カン　グニッ

「ん？　なんだいまの……」

モンスター　スライムだった

ベチィィィィッ！！

「「どわあああああああ

第二十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　分かれ道の案内人　（Ｌｖ．６）

「さあ　あなたは　みぎとひだり　どちらのみちに　いきますか？」

「うーん　……みぎだ！　みぎにいく」

「みぎですね　では　おきをつけて……」

おとこは　みぎのみちへと　すすんだ

（どちらにすすもうが　あのよいき　ですがね）

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「スライムですか　あなたは　どちらのみちへ？」

ベチャァッ！

「ぐぅあああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

あんないにんに　しょうりした

スライムは　ちょくしんした

第二十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　罠師ライド　（罠師Ｌｖ．２７）

バチン！

スライムは　トラップに　ひっかかった

「よっしゃああ　えものが　かかったぜぇ！」

ライドが　きしゅうをしかけてきた

ぐにゅり

スライムは　トラップを　とりこんだ

「なっ……」

ビシビシビシッ！

「う、うわあああああああ

第二十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　宿命のライバル　ガイズとタナトス　（騎士Ｌｖ

「うォオオオオオオオオオオオオオオオ　ガイズゥゥゥゥ！」

「タァナァトォォースゥゥゥゥ！」

ギィン　ガッ　ドカッ　ヒュン

「きさまさえ　きさまさえいなければぁぁ！」

「いいぞ　もっとだ　もっとおれを　たのしませろォ！」

ガサッ……

スライムが　あらわれた

「「これで　おわりだぁぁ　ひっさぁぁぁぁーつ……」」

バシ　ベシ

「「ぐわあああ！？」」

ガイズとタナトスに　しょうりした

第二十六ゲル　無敵S　VS　瀕死パーティー　サファイア　（戦士　治療師

「もうおわりか？　チームサファイア」

「ぐ　おのれ　こんなところで　ぜんめつしてしまうのか」

「そうだ　せめてやすらかに　……きえてしまえ！」

モンスター　レッサーデイモンは　デスフレイムをしようした

ガサッ……

スライムがあらわ……

ドンッ！

「なっ　ス、スライムだと！？　じゃまをするな」

「！？　すきありぃぃ！」

ズバッ！

「ばかな　そんなことがぁぁ！？」

レッサーデイモンに　しょうりした

「かった……のか？」

ズドッ！

「ぎゃあああああああああ！？」

瀕死パーティー　サファイアは　全滅した

第二十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　迷子勇者セイン２　（勇者Ｌｖ．？？）

「いくらあるいても　でくちがない　……さては　てきのようじゅつか！？」

ガサッ……

「！？　あまい　そこだ！」

セインは　ソニックカッターツヴァイを　しようした

ズバァッ！！

モンスター　スライムは　バラバラになった

「あっ　またスライムだったのか　……ものすごい　さっきをかんじたと　おもったのに　ホントにごめんな」

セインは　さきをいそいだ

ズル……ピチ、ピチ……

スライムは　くっつきさいせいした

「……」

スライムは　セインのすがたを　きおくした

第二十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　呪咀吐きアン　（呪術師Ｌｖ．４１）

「ああ　……にくい　にくたらしい」

ガサッ……

モンスター　スライムが　あらわれた

「ああ　にくい　くるおしいほどにくい！　いのちとひきかえにしても　おしくないほどにくい！　にくいにくいにくいにくいにくいにくい！」

ベシッ！

「おぉのれぇぇぇぇぇぇぇ　おまえもにくいぃイイイ

第二十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　賞金稼ぎライル　（ソードマスターＬｖ．９９）

「わたしに　かてるわけ　ないだろう！」

モンスターの　むれにしょうりした

「きわめにきわめた　わがけんじゅつ　もはや　このように　てきはない！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「きたな　……スライムのばけもの！」

ライルは　ヘイズスライサーを　はなった

ズバッ！

スライムは　バラバラになった

「ちがったか　……うわさの　むてきスライムとは　いったい……」

ズルズル……

「むっ？　こいつまだ……」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

「なっ……？」

勇者セインスライムが　あらわれた

第三十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　賞金稼ぎライル２　（ソードマスターＬｖ．９９）

「なんだと　……こいつ　すがたを　コピーしたのか！？」

セインスライムは　ドラゴンバスターを　しようした

びしゅっ！

「ぐっ、ぐあああああああ

第三十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　討伐依頼

【重要依頼】

“スライム”一匹の捕獲、もしくは討伐。

【依頼内容】

上記の通り、スライム一匹の捕獲、もしくは討伐を願います。但し、突然変異体と思しき異常な能力を持つ個体に限ります。出来得る限り生け捕りにし、依頼主の元へ運搬して頂ければ有難いです。

【依頼達成報酬】

捕獲……二千万エン

討伐……五百万エン

【依頼主】

ギルドＮｏ．４６４９　パーティー昇龍

「おいおい　……なんだこの　ぼうけんしゃを　バカにしたよう

な　いらいは」

「しかもパーティー昇龍のいらいだと？　スライムのいっぴきもたおせないのかよ？」

そのとき　ひとりのおとこが　ギルドにあらわれた

「ん？　あいつは　ライルじゃないか？」

「ほんとだ　あのてんさいけんしか　……ボロボロみたいだがまおうにでも　いどんだか？」

「よぉライル　どうしたおまえらしくねぇ　だれにやられた？」

「……スライム……」

「えっ……！？」

「わたしはスライムに　まけたんだ！　おいギルドマスター、パーティー昇龍につたえておけ、二千万では　わりにあわないとな！」

「な……し、しょうきかライル？」

「ああ、わたしはしょうきだ！　ほかくなんぞも　できそうにない　五千万だ　とうばつに　五千万よういしろ！」

ライルは　いつものさけをのみほして　でていった

「……おいおいおい　どうやらこのいらいは……」

「おおあな　らしいな」

ぼうけんしゃらの　めのいろが　かわった

第三十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　女魔王カルミンツァー　（魔王Ｌｖ．？？）

「うふふふ　できた」

カルミンツァーは　ばらのはなを　まんぞくそうにみおろした

「ああ　ゆうしゃセインは　まだここにこないのかしら　ここではやく　……かれにあいたいわ」

ガサッ……

「！？　だれっ！？」

カルミンツァーは　ディメンジョンシュートを　しようした

ぐばぁっ！

モンスター　スライムは　じくうのはざまに　たたきこまれ　しょうめつした

「……スライム？　ここまで　スライムがはいってきたの？　けいびは　いったいなにを……」

スライムに　しょうりした

第三十三ゲル　無敵S　VS　そこそこパーティー　パンジー　（戦士Lv.3

「な　なあ　ばけものスライムのとうばつなんて　ボクらには
にがおもくない？」

「だいじょうぶさ！　さっきあやしげなみせで　でんせつのせいけん　エクスカリバーを　ぜんざいさんはたいて　かったじゃないか」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「きたな　くらえっ！」

ブンッ　ボキッ！

「えっ　お、おれた……？」

「まさか　これは……」

ビシッ　バシ！

「「にせものだぁぁぁ

第三十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　扱き使われている村人達　（一般人）

「おお　スライムがおったぞ　みなのしゅう　つかまえるんじゃあ！」

バタン　カチャ

スライムを　おりにとらえた

「しかしなんだ　スライムなぞつかまえて　どうするっつうんじゃろ」

「さてなぁ　おやくにんの　かんがえることはわからんわい」

「はたけもたがやさなならねってのに　めいわくなもんだ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おい　あすこにも　スライムがおるで！」

「ああ　ええわい　もうおりもいっぱいだぁ」

むらびとらは　ひきあげていった

第三十五ゲル　無敵S　VS　パーティー　デコチビ　（ハンターLv．45）

「そっちいったぞ　デコ！」

「デコいうな　チビ！」

デッコーは　アイアンネットを　しようした

バサッ

スライムのほかくに　せいこうした

「よくやったぞデコ！　スライムつかまえてつれてくだけで　五千万　かるいもんだ」

「しかしへんいしゅだとか　……こいつは　ただのスライムだろ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おっ　またでたぞデコ！」

「いいかげんにしろ！　おれはデッコーだチビ！」

バサッ

ブチッ！

「「えっ……！？」」

ベシッ　バシィ

「「ぎゃあああああああああああこいつだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」

パーティー　デコチビにしょうりした

第三十六ゲル　無敵S　VS　ベテランパーティー昇龍　リーダー　ブレッド

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「くっくっく　……さがしもとめていたよ　あれから　くんれんをくりかえし　かんせいしたわざ　とくとみよ！」

ブレッドは　スライムキラーを　しようした

スドン！

スライムは　こっぱみじんになった

「やった　……やった　ついにかったぞォォォ！」

「うーん　むにゃ……かったぞー……」

ブレッドは　ゆめをみている

「む？　ぎゃあああああああああああああああああああああああ！？」

ゆめのなかで　スライムにはいぼくした

第三十七ゲル　無敵S　VS　迷子勇者パーティーの一人　ファル　（超魔導師

「たおせ～すすめ～ごーごごー」

ガサッ……

「ん？　モンスターかなー？」

モンスター　スライムがあらわれた

「スライムー？　なんでこんなとこに？」

ひゅっ！　ビリッ

ファルのナップザックがやぶれ　ふんまつがまった

「うわっ　あぶないなぁー　……ただのスライムじゃない？」

スライムは　こなをかぶった

「！！！！！！！！！？？？？？？？？？？？」

スライムは　ほうかいした

「えっ？　なんで……？」

スライムに　しょうりした

「まっ　いいか　すすめ～」

第三十八ゲル　無敵S　VS　秀才パーティー　マナバャアタケラア・ヌヴェン

「スライムかー　スライムといえば　せいそくちはどこになる？」

「だいたいせかいじゅう　どこにでもいる　それよりもこのばあい　スライムのとくせいをしらべる　べきだ」

「それこそむいみ　へんいしゅと　ふつうのこたいの　ちがいをしらべるべき」

「まずは　あるくべきでは？　ミーティングもいいが　それだけでは　むいみだ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「だからだな……」

「ちがう！」

「むいみ！」

「りかいふのう！」

バシバシバシバシ！

「「「「「ばかなぁぁぁぁずのうがまけたぁぁぁぁ

第三十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　秀才パーティー　マナバャアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

豆知識

マナバャアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

訳……偉大なる高みへと到達せんため常日頃より神の知識に触れ続ける賢い四人組

因みに略して、マヌケ

第三十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　矛盾商人チャック　（商人Ｌｖ．３７）

「このたては　すべてのこうげきをふせぎ　このほこは　あらゆるものをつらぬくよ！」

「なら　そのほこで　たてをついたら　どうなるの？」

「えっ　あ　あー……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「どうなるの？　ねぇ」

「そ、それは……」

スライムの　こうげき

バガン！　ベキィッ！

「ああっ　さいきょうのたてとほこがこなごなにぃぃぃぃー！？」

ベシッ！

「「うわあああああああああああああああああ！？」」

矛盾商人チャックに　しょうりした

第四十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　スライム保護団体　（会員　×　３）

「はんたーい　はんたーい　スライムのらんかくを　ゆるすなー！」

「スライムをほごしろー　やばんなぼうけんしゃらに　てっついをー！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おおっスライムだ　こわがらなくていい　われわれは　きみたちを　ほごしに……」

バシィ！

「ぎゃあああああああああああああああー！？」

「「かいちょう！？」

ベシャ　ビタン！

「「うわあああああああああああああああああああ！？」」

スライム保護団体に　しょうりした

第四十一ゲル　無敵S　VS　喧嘩中のパーティー　ラブアンドピース　（剣士

「おねがい　わたしもたたかうわ　かたきをうたせて！」

「ダメだ　きみはてを　よごしちゃいけない！」

「どうして！？　かたきをうつまで　いきろっていってくれたじゃない！」

「あれは……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「うそつき！　わたしは、わたしはっ！」

「ちがう！　おれは……」

ビシッ　バシィ！

「きゃあああああああああああ！？」

「ぐわあああああああああああああ！？」

パーティー　ラブアンドピースにしょうりした

第四十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　無駄骨折りのルーフ　（東洋流剣士Ｌｖ．５５）

“うーん　……どれもちがいます　これではしょうきんは　はらえません”

「くそっ　昇龍のれんちゅうめ！　スライムはスライムだろ　どうちがうってんだ！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ちょうどいい　てめえのせいで　とんだむだぼねだ　はじけろオォ！」

スライムは　カウンターをくりだした

ドカァッ！

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおぜんぜんちがうぅぅぅ

第四十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー　ローンウルフズ　（ロック吟遊詩人

「は？　スライムぅ？　んなもんに　きょーみねえし」

「おれたちゃ　やりたいことやるだけなンだよ」

「いやでも　ほうしゅう五千万だって……」

「「ご、五千万！？　……なんつーか　スライムていま　どストライクだし！」」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「「よっしゃ　いっちょはでに……」」

ビシッ　ガスッ

「「マジでかぁぁぁ

第四十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　修羅場中パーティー　アーリースカイ　（女戦士

「なんなのよアンタ！　スカイからはなれなさいよ！」

「えーーなんでですかぁー？　もしかしてぇー、スカイさんとアリィさんはぁ　そーいうかんけいなんですかぁ？」

「！？　そ、そんなわけないでしょバカぁ！」

「ま、まあまあふたりとも　なかよくなかよく……」

「そーですよぉ　あたしとスカイさんみたいに　なかよくしないとぉー」

「ッ！！　もうしらないっ！　おふたりとも　おしあわせに！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

（スカイのバカバカ！　だいっきらい！）

ビシッ！

「きゃあああああああああああああああああああああ！？」

「アリィ！？　うおおおおおおお！」

「あっ　スカイさん！？」

「アリィは　ぼくがまもるんだぁぁ！」

バシン

「うわあああああああああああああああああああああ！？」

（そうなんだ　これがふたりのつよいきずな　……かなわないなぁ　ホント）

パシィッ！

「きゃあああああああああああああああああああああ！？」

パーティー　アーリースカイにしょうりした

第四十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ベテラン部隊　ストロベリーパフェ　（ソルジャ

「そっちだぁー！　そっちにおいこんだぞ！」

“つうしんじょうきょうよし　りょうかい！　これより　……うっ、うわああああああああああああああああ！？”

「なっ！？　どうしたクッキー！　ちっ、レンガよ　クッキーがやられたらしい！」

“こちらレンガ　しゅういにけいかいし　……ぐあああああああああああああああああああ！？”

「なっ　……もう　やられたというのか？　そんなバカな……」

ガサッ……

「！？」

モンスター　ス　ラ　イ　ム　が　……

う　うわああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

第四十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　復活の神殿の人々

「さいきんは　ふっかつのいのりを　うけるものが　ふえてますね」

「そうですね」

ガサッ……

「むっ！？　だれですか！」

モンスター　スライムがあらわれた

「なぜモンスターが！？　おいだしてしまえ！」

「まちなさい　……かれはきずついています　かいふくのじゅつを」

「しっ　しかし　モンスターですよ？」

「かけておやりなさい！」

「はい……」

エールは　かいふくのじゅつをとなえた

スライムは　かいふくした

ズルズル……

スライムは　でくちへと　すすんでいった

「な　なぜ……？」

「モンスターにも　こころがあります　それをわすれてはいけません」

第四十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　盲目の美女シーラ　（救済者Ｌｖ．？？）

「アナタは　なんなのです？」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「なんだか　すごく　かなしそうです」

“……”

「きかせて　あなたのオモイを……」

シーラは　ダイブインマインド　をしようした

“……る、……こん……く……あい……ド……む……ない……”

「えっ？　よくきこえない……？」

バシィ！

スライムの　こうげき

「きゃっ……」

スライムは　にげだした

「あっ、まって！　……どうして　どうしてなの？　きこえなかったの　はじめて……」

第四十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　体調の悪い男ベイン　（破壊戦士Ｌｖ．８８）

「ううっ　くそう　なんだかふらふらするし　さむけがするぞ……？」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ちくしょう　スライムかよ　……きょうはみのがしてやる　なんだか　はなもむずむずしてきやがったしな！」

べちゃっ！

「ぎゃあああああああ

第四十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　被害者代表ブレッドとクリス　（重戦士　アサシ

「ふぅぅぅん！　はぁぁぁっ！」

月光照らす野原の上で、一人の男がひたすらに剣を振るう。少しでも腕に覚えの有る者ならば分かるだろう、荒れ狂う波にも明確な法則があるのだと。

男の名はブレッド。かつてのパーティー昇龍のリーダーであり、かつて魔王打倒でさえを目標にした男。

だが……そんなものは無価値だったと、彼は言った。

「俺様は……いや俺は、勝ちたい……」

頭を丸坊主にし、何故か片眉を剃り落とし、どうしてか上半身裸で素振りを続ける彼。その鬼気迫る様子は東洋で言うところの赤鬼か閻魔大王か、である。

「ざぁぁ！　だりゃあああ！　……何か用か」

ピタリ、と素振りを突如止めた鬼は言う。

「さっきからずっと、こちらを伺ってるよなぁ？　誰だか知らんが出てこい、相手になるぞ」

ブレッドの指摘した木陰から、それは素直に月の下へと現れた。

「さすがです……パーティー昇龍……リーダー……ブレッド殿」

「女、か。残念だったな、俺はもうリーダーではない。ただの一冒険者だ」

「そうでしたか……しかし……パーティーの方は……あなたの帰り……待ってましたが」

ハエがブンブンと頭の周りを回ってるみたいな調子で、女は語る。だがブレッドには、不思議と一言一句がはっきりと響いた。

「では……一つだけ、お聞きしても？」

「内容次第だが」

「……申し遅れましたが、私はアサシンアサルトというパーティーのリーダー、クリスといいます。名前位は知っているでしょう？」

女は顔を覆う覆面を外し、言った。月光があるとはいえ、微かに口元と目元が見えた程度だ。

が、ぶっちゃけて言うならば期待通りの美女であった。ブレッドが以前公言していた好みのタイプ、それともピタリ合致する。

「スライムに関する依頼……あれを出したのはあなた？」

クリスは問う。依頼とは、無論アレの事だ。今世間で話題騒然の

ヤツなのだ。しかしブレッドは知らん！　と一喝。更には詳しく教えろとさえ言って来たのである。

「えっと……だから……突然変異スライム討伐で五千万エン、とあなたがリーダーだったパーティーから……依頼が出てるの」

「なんだとぉぉ！？　馬鹿かあいつらめ……“パーティー昇龍は無様にもスライム如きにやられてしまいました☆”と言い触らしてる様なものではないか！」

「まあ、そんな些細なゴタゴタは放置して……」

「些細だと！？　放置だと！？」

「つまりアナタは、とてつもない素早さと攻撃力、知性までもを兼ね備えた化け物スライムに負けたという事だろう？」

「ち、知性があるのかは知らんがそうだ！　信じられるのか、この惨めで無惨な俺様をを！」

「ええ」

「……え？」

「ええ」

「え、えええ？」

一言どころか一文字。

「私も、そいつにやられたからだ。ただのスライムと変わりない外見だった……」

ガサッ……

「「！？」」

モンスター　スライムがあらわれた

「ほぅ、噂をすればなんとらや、か。丁度いい……」

ブレッドは戦闘態勢に入る。

「……私もだ、私にも戦わせて貰う」

クリスもまた、戦闘態勢を取る。

「引っ込んでろ、アレは俺の怨敵よ」

「なんとやらを、なんとらや、とか言う男は危ない。お前こそ引っ込むがいい」

「……好きにしろ。ただし邪魔はするな」

「お前こそ」　二人は同時に駆け出した。

つづく

第五十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　被害者代表ブレッドとクリス２　（重戦士　アサシ

ビシィィィィィィ！

「「ぎゃ亞あああああああああああああああああアアア

第五十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー１　（勇者　魔

この世界において“最強のモンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

意見様々、異種異論はあろうが大概の人々はこう答えるであろう。

“魔王”と。

「ふふっ、もうちょっと」

天高くそびえ立つ魔王城、その最奥の一室にて魔王と呼ばれる者は密かにほくそ笑んでいた。

魔王“カルミンツァー”である。漆黒の鎧を身に纏い、二本の角は雲を向く。それは代々続く由緒正しき魔王の血統の証だ。

だが魔王とはいえ、れっきとした女でもある。初め女性であるからという理由で魔王候補が乱立しかかった事もあったが、最近はその実力を思い知ったのか異論を唱える者もいない。

「……何をなさっておいでです、カルミンツァー様」

「ああ、ドクトル。見て分からない？　部屋を薔薇の花で埋め尽くそうかと思って、一本一本植えてるのよ」

ドクトル、と呼ばれた白衣の男は、シルエットの約半分を占める程の巨大な頭を揺らし、言う。

「見れば分かります。その様な行為をなさる意味を訪ねているのですが」

「それはね、勇者セインの為よ。彼がここへと辿り着いた時こそ、最後の戦い……それをより派手に演出するの。攻撃の度に花びらが散るなんて絵になると思わない？」

「勇者セインですか。貴女は口を開けばそればかりだ。既に悪魔四天王も敗北しました、暗殺でも闇討ちでも行えばいいと考えますが」

「ふぅん、ねぇドクトル……あなたももっと感情的になりなさいよ。人間でも唯一私の目にかなった者、そう、セイン。でも私は魔王だった、許されざる関係、覗く悲劇。それを精一杯飾るのに意味は無いかもしれないけれど、気分は凄く高ぶるの。どちらかが歴史の一ページになるのは必死、だけどそれが私であれ彼であれ、ただの一枚じゃツマラナイ……アナタに分かって？」

「理解に苦しみますな」

「ま、いいわ。ちょっと出掛けて来るから」

「また……奴の所ですか」

「野暮はなしにして頂戴。じゃ、留守は任せたわ」

魔王は窓を開け放つ。雷と暗雲と時々強風……背中のコウモリ状な翼を広げ、飛び立った。向かい風を切り裂き推力に変えて。

「……ふん、ヒロイン気取りの小娘が……。私の様な知識を持つ者こそが、王に相応しいのだ……なぁ、わたしの可愛い可愛い……」

ガサッ……

・

勇者セインは、道に迷っていた。なんとか山を二つ越えた、が、仲間とは依然はぐれたままだし、そもそもここがどこか分からない。

「うぅ……は、腹が、減って……目眩が……」

山を下り始めた頃合いからか、モンスターが一匹たりとも現れなくなった。現状、モンスターを求めるセイン、理由は人間三大欲求の一つ、食欲。

「く、そ……なんで……モンスターがいないんだろう……め、メシ……」

遂に膝が地に付く。景色が暗転しぐにゃぐにゃにねじれて来た。最早限界か、という時に彼を救ったのは一陣の風だった。

ふわっ、と鼻元を抜ける風。心地よい……肉の香りが！　風に肉の香りが混じっているではないか！鳥か豚かそれともゴブリンかそれともそれとも……この際何の肉でもいい、食えさえすればなんでも構わん！　セインはがばと瞬時に身を起こすなり、弩弓が如く駆け出した。

「メシだぁぁぁぁ！　メシのぉぉ匂いだぁぁぁぁぁぁ！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれ……

「メシぃぃぃぃぃ！」

ゲシッ！

「！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

スライムに　しょうりした

さて、勇者は凶悪スライムを撃破したことにも気付かず、匂いの発生源、即ちポツンと建った古びた屋敷に辿り着いた。かなり前に放棄されたのか、外壁のレンガはひび割れ或いは欠け……名も知らぬ植物のツタが絡む。

どう見積もっても、二・三年は人が居なかったであろう屋敷。しかし空腹勇者は一直線に扉へ向かい、ドンドンドンと激しくノック！

「すいませぇぇん、誰かっ、誰かいませんかっ！」

本当は誰かが居ると分かってる。嗅覚刺激がなによりの証拠だ。

「はぁーい……あら、勇者セイン様」

「え？　……えええぇぇ！？　カルミーさん！？」

そう、勇者と魔王は顔見知りだったのです。

第五十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー２　（勇者　魔

「いただきまーす！」

セインは　りょうりにとびついた

「ふふふっ　セインさまたら　よほどおなかを　すかせていたのですね」

「あっ　こ、これはしつれい　おみぐるしいところを……」

「いいえ　おいしそうにたべられるのは　なんだかうれしいです
さ、どんどんたべてください」

「あ、ありがとうございます　ほんとうにカルミーさんの　りょうりはおいしいです！」

たべるセイン　ながめるカルミンツァー

「ん！？　カルミーさんさがって　なにかいる！」

「えっ？　えぇ……」

（たしかに　……なにかしら　このまがまがしい　けはいは）

ガタッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「スライム？　……いや　ちがう　もっともっとじゃあくな　なにかだ」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

スライムは　ゆうしゃセインの　すがたをコピーした

「「なんだと！？」」

第五十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー３　（勇者　魔

キィン！　カン！

「くっ　こいつ　のうりょくまでいっしょなのか！？」

（たしかに　……あのうごき　セインにまさるともおとらない）

「！！！！」

ばしっ！

セインのつるぎは　くだけた

「しまった！？」

スライムの　ついげき

「セインは　……やらせない！！」

カルミンツァーは　アブソリュートゼロを　しようした

「！！！！！？」

スライムはこおりつき　こなごなにくだけた

スライムに　しょうりした

カルミンツァーは　ほんらいのすがたに　もどってしまった

「……え、カルミー……さん？　そ、そのすがたは……？」

「……セイン　……ばれちゃったか」

「まさか、そんな　……カルミーさんは……」

「そう　わたしはまおう　カルミンツァーなの」

「う、　うそだぁぁぁ

第五十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　まあまあパーティー　タンポポ　（戦士Ｌｖ．４

「な、なぁ　おれたち　だいじょうぶだよな？」

「だいじょうぶさ　しっかりと　たんれんをつんできたじゃないか！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「へっ　スライムなんぞ　ひとひねりだ！　いくぞ　てんちのかまえ！」

「おおっ　はじゃのかまえ！」

スライムは　ようすをみている

「「くらえひっさつ　てんちいんようあっきめっさつはじゃたいせいおおばんちかいなんかせいじょ、ガリッ……」」

ふたりは　したをかんだ

ビシ　バシィ！

「「うわあああああぁぁぁ

パーティー　タンポポにしょうりした

第五十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー味噌醤油風味

「ぎゃあああ！？」

ビシッ！

「ぐはあああ！？」

ドスッ！

「なんとおおお

第五十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　宿屋の受付嬢　（一般人）

「いらっしゃいませー！」

ガサッ……

モンスター　セインスライムがあらわれた

「おとまりですか？」

セインスライムは　うなずいた

「えっと　おへやはどちらに……」

チャリチャリン……

セインスライムは　３０００エンを　しはらった

「あ、ありがとうございます　３０００エンということは　いっぱんですねー」

セインスライムは　うなずいた

「では　３０３号室です　どうぞ」

セインスライムは　へやへと　いそいだ

（みつけたぞ　ゆうしゃセイン……）

こくいのおとこは　セインスライムの　あとをつけていった

第五十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　黒衣の復讐者　（デモンＬｖ．８８）

「ゆうしゃ　セインのへやは　ここか……」

３０３号室まえ

「きさまにうけた　くつじょく　いまこそはらすとき！」

バァン！

「ゆうしゃセイン　かくご！！」

モゾ……

へやのなかには　スライムがいた

「なにっ！？　セインはどこだ！」

バシン！

「ぐおおお

第五十八ゲル　無数Ｓ　ＶＳ　宿屋の窓ガラス　（１２５０エン）

「なにごとですか　いまのひめいはー！？」

３０３号室に　ひとがあつまってきた

「なんだあれ！？　モンスターがたおれているぞ　あくまだ！」

ガサッ……

「おい　あそこにもなにかいる！」

モンスター　スライムがあらわれた

「なんでスライムやら　あくまが　こんなところに……？」

パリィィィィン！

スライムは　まどガラスを　ふんさいした

シュバッ！

スライムは　にげだした

「ああっ　にげた！」

「まってー　せめて　ガラスのしゅうりだいをー！」

チャリン

しゅうりだいが　なげこまれた

第五十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　隙を伺っていた男マーフィ　（ギャンブラーＬＶ

「よし　いまだ！」

マーフィは　スライムをほかくした

「よっしゃ　こんどこそ　あたりだろ！　ぼうけんしゃを　けちらしていたの　みてたんだぜ！」

スライムは　ていこうしている

「むだだむだだ　このかごは　キルフハッシャのかごだ　おまえにはもったいないレアアイテムさ！」

ガンッ　ガンッ！

「さーて　いらいぬしのところへ　もっていくか！」

ガンッ　ガンッ　ガンガンガンガン　ガガガガガガガガガ

「うわっ！？　いてて　おとなしくしてろ！」

スライムは　つれていかれた

第六十ゲル　無敵S　VS　スライムを捕獲した男マーフィ　（ギャンブラーL

「よし　ここか」

マーフィは　パーティー昇龍の　ほんきょちにたどりついた

スライムの　ていこうはやんでいた

「おい　スライムをもってきたぜ　こいつこそ　まちがいなくほんものだ」

「かくにんさせていただきます　……しんでませんか？」

「なんだと！？」

スライムは　ほうかいしている

「ばかな　さっきまでは　ぴんぴんして……」

マーフィは　かごをあけてしまった

ヒュッ　バキィッ！

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

マーフィに　しょうりした

第六十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー昇龍　（剣士　炎魔法使い　賢者ＬＶ

「まちがいない　こいつだ　このスライムがやつだ！」

パーティー昇龍は　さっきだった

「いまはなき　おじちゃんのかたき　とらせてもらうからね！」

「いや　ふつうに　ピンピンしてますが？」

「ま、まあともかく　かくごしろスライムめ！」

“……”

スライムは　メタモルフォーゼをしようした

パーティー昇龍リーダー　ブレッドスライム　があらわれた

「「「なにぃぃ！？」」」

ブレッドスライムは　ひっさつのかまえを　とった

「ちょっと　あれってまんま　おっちゃんじゃん　わたしむりー」

「いくらにせものとわかっていても　……やりにくいですね」

「くそォォォォ　なんだってこんなこと！」

スライムは　おうぎを　はなっ……

「なにしているきさまらー！　パーティー昇龍のながなくぞ！」

“！？”

「このこえは……」

「もしかして……」

「いや　もしかしなくても……」

「てきをまえに　すきをみせるなと　おしえたはずだー！」

リーダー　ブレッドがあらわれた

「「「リーダー！」」」

「スライムやろう　おれがきたからには　もうすきにさせん！」

“……”

ブレッドは　ひっさつのかまえをとった

つづく

第六十ニゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　被害者代表リターンズ　１

「喰らえぇ、ソードバンカァァァァー！」

地を捲り上げ奔る衝撃波。ブレッドの放った一撃により戦いの火蓋は切って落とされた。

ブレッドスライム、略してスラブレはひょいと身を躱すと、本物と同等の大剣、を片手で操った。負けじと剣を正面からぶつけるブレッド。

「ぐぐっ……力比べは不利か、だがな……」

「リーダー、任せろ！」

「応！」

ブレッドは更に力を込め、スライムの両手を、剣を封じる。その隙に背後より戦士ノールの剣撃が強襲。

キィン！

と、金属音。背中目がけ振るった剣は第二の剣、それを持つ第三第四の腕により阻止されていた。背中、肩甲骨下より生えた腕が二本。

「うおっ、なんじゃこりゃあ！？」

「ビビってんじゃねぇノール、何でも有りな相手なんざ今更だろ！」

二人の力にびくともしないスラブレ。そこに魔法使いが言う。

「二人とも間に合ったら下がってねー！　ひっさぁーつファイヤレイン！」

上空に描かれた巨大な魔方陣。炎魔法使いフェイによる広域殲滅魔法が発動したのだ。一定範囲内へと隕石群が如く火球が降り注ぐ。

「「ちょ、フェイィィィィー！」」

どうにか効果範囲から滑り込みで脱出した二人。一方スライムは爆心地に居た。荒れ狂い燃え盛る炎の雨が偽物にヒットする度、姿をグニャリと溶かし変形させてゆく。

そこに賢者クロルが、術式を完成させた。光が突き出された両手の平に収束してゆく。

「聖なる光よ邪を貫けディバインレイザー！」

焦土と化したその場所へ、三本の光の矢が飛来。人間の型を崩しつつあったスライム本体を確実に穿つ。未だ、ピクピクと敵は動いていた。

「リーダー！」

「いっけぇおっちゃん！」

「今です早く！」

メンバーの声が重なった。ブレッドは熱くなりつつある目頭を押さえつつ、四肢に力を込める。

「お前ら……よぅし、任せろ！」

地を蹴り上げ、ブレッドは再度……いや、今度こそスライムへと突撃を敢行する。本人の強い感情か、はたまた技か剣がより鈍く光っていた。

と、そこへ彼と足並み揃える者が一人、どこからともなく現れた。直前まで、存在を気付かせないとは流石である。

「私も行かせて貰うぞ、ブレッド」

「クリスか！？　無事だったようだな」

「当然だ、奴を倒すまで休む訳にはいかない」

短刀握りしめ走るのは、パーティーアサシンアサルトの元リーダー、クリス。目的は彼女も一緒、スライムの打倒である。

「それはダメだ、トドメは俺がさす！」

「なら競争だ、早い者勝ち」

「それでいい！」

意見はまとまった。

「「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」」

二人は吠える、獣の様に。その咆哮に感応したか、スライムは途端に活性化し身体を風船みたいに膨らませてゆく。その外面にはまんべんなくトゲが並ぶ。

針マンボウが膨れっ面を見せているみたいだ。そして、次にその刺々をミサイルの様に飛ばして来た。

襲い来る、ニードルのシャワー。が、二人は最早そんなモノでは止まらなかった。いや、どころか益々加速する。ただの一点、目指すは憎っくきアイツ。

「ぐっあああああああああああああ！？」

しかし……クリスが一発のニードルに肩口を貫かれ、その場に崩れる。

「なっ、クリス！？」

そして思わず振り返ったブレッド。直撃を受ける、ただし剣にだ。自慢の大剣が杭の様になったニードル直撃により真っ二つに。

後少し、後少しなのに！

「くっ……だが俺にはまだ拳が……」

「ブレッドォォ、私のエモノを使えぇぇぇぇ！」

クリスだ、彼女が最後の力を振り絞り短刀を投げ付ける。一直線に飛びニードルを躱し、そして見事、ブレッドの手中へと納まる。

「恩に着る……スライムよ、トドメだァァ！」

尚も飛来するニードルを避け、くぐり或いは跳ね、そうしてついには彼は間合いに飛び込んだ！

「リーダー！」

「おっちゃん！」

「ボス！」

「ブレッドォォ！」

「「「「「いっけぇぇぇ

第六十三ゲル　無敵S　VS　被害者代表最終回

ズバァッ！

“……！！！？”

スライムは　まっぷたつにきりさかれた

「やっ……た……？」

ピク……ピク……

ドロッ……

スライムは　うごかなくなった

「やっ、たあああああああああああああああああああああああああああああああああたおしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

パーティー昇龍は　スライムにしょうりした

「う、うおおおおおおおやったぜリーダー！」

「おっちゃんすごい！」

「やりましたね、ボス！」

なかまは　リーダーのもとに　かけよった

「おれはいい　それよりクリスを　たすけろ！」

ガサッ……

「むっ？」

ガサッガサッガサッ

「おまえたち　クリスをつれてたいひだ　おれがじかんを　かせぐ！」

ブレッドはいった

「いいやリーダー　おれものこるぜ　ちゆじゅつつかいのクロルと　フェイはさっさとにげろ！」

「どうやら　ぜんめつをさけるためにも　そのほうがよいでしょう　どうかごぶしで」

クロルは　てったいした

「わたしはのこるよ！　なぐるけるばっかじゃ　バランスわるいでしょ」

「すまんフェイ　では　いくぞ！」

「「おう！」」

スライムらは　いっせいにうごいた

「「「おれたちの（わたしたちの）たたかいは　これからだ！！！」」」

むてきスライムは　こんかいをもって　しゅうりょうです

いままでの　ごあいどく　ありがとうございました

第六十三ゲル　無敵ＳＶＳ被害者代表最終回（後書き）

ウソですよー。

閑話休題

スライムバブル　いらいのとりさげにより　しゅうりょう

かくちのはんのう

―ぼうパーティー

「ぎゃあああああああああああああ！」

―ぼうきぞく

「ひいいいいいいいいいいいいいいいい！」

―ぼうゆうしゃ

「カルミーさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

―ぼうまおう

「ゆうしゃよ　まおうじょうでまつ　そこまでやってくるのだ！」

―？？？

“ぼくは　ほんとうは　こんなことしたくないよ　のんびり　していたいんだ！”

さまざまな　かんがえが　こうさくする

第六十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　特産品販売員トラス&ジョーヌ　（一般人）

「うそだろ！？　どうするんだよ　このスライムまんじゅう……」

「うれなくなるまえに　うりつくすしかないわ　こっちのスライムゼリーも」

ガサッ……

「えっ？　いまゼリーがうごかなかった？」

「そんなわけ……」

ビシッ　バシッ！

「「うわあああああああ

第六十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　なかなかパーティー　アマリリス　（戦士Ｌｖ．

「な、なあ　ボクたち　だいじょうぶだよな？」

「しんぱいするな　ボクたちには“けものよけのおこう”　があるじゃないか　モンスターとはそうぐうしないよ」

ガサッ……

「ひっ　なんだよ　おこうきかないじゃないか……」

「じょうきゅうモンスターか！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「なんだ　スライムじゃ……」

「まつんだ　ステータスのかくにんをしよう」

アイテム　チェックキーをしようした

【スライム】

こうげきりょく　？？

ぼうぎょりょく　？？

たいりょく　??

スピード　??

そうごうりょく　??

「な、なんだこれは!?」

ドカバキィッ!

「「いやあああああああ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2004x/

無敵スライム

2011年12月5日19時00分発行